〔駒沢女子大学　研究紀要　第29号　p. 63 ～ 80　2022〕

コンキスタドールとしてのクローデル
～『黄金の頭』と日本旅行での散文詩～

井　戸　桂　子*

A Study of Paul Claudel as Conquistador
~ *Tête d'Or* and the prose poems written in the first visit to Japan in 1898~

IDO Keiko*

1　クローデル大使の世界制覇の実現

フランスの詩人・劇作家で外交官のポール・クローデル（1868 ～ 1955）は、日本に２回滞在した。1898年、中国に副領事として勤務中、初の長期休暇で３週間日本を旅行し、その後1921年に、大使として赴任し1927年まで日本と深くかかわった。各々29歳と53歳の時であり、訪問者の立場も、迎える日本の状況も、さらに文学者としての達成度も、大きく違っていた。

二度目の滞在の時は、「東洋という偉大な書物をもう一度よみときたい」[注1)] と日記でも示した通り、日本各地を旅して、異文化を把握し、大使として両国の相互理解に努めた。文学者としては、大作『繻子の靴』を書き上げ、主人公ロドリーグに自らの姿を重ね、それまでの人生の危機を解決することも出来た。その姿とは、カトリック者として神の召命を受け、世界を一つにつなげるコンキスタドールになることである。[注2)]

このコンキスタドールになったという感覚は、1924年１月の日記に確認できる。

> 『黄金の頭』。20歳の頃、シャンシーの高みから、ジェアンの後方に、パリに向かって広がる広大な谷と夕日を眺めていたこと。わたしが実現したのは、この宇宙征服の野望であった。[注3)]

じっさい、1888年20歳の時、故郷のジェアンの丘（俗称「巨人岩の丘」）で想を得て、若き征服者を主人公とした劇『黄金の頭』を書いた。そして、晩年の文章『私の故郷』において、「ウルク川の谷、それはパリへ、世界へ、海へ、未来へと通じる切り通しなのだ」[注4)] と振り返るように、少年クローデルは、パリに出て、海に出て、世界に出て、と未来における宇宙所有の夢を膨らませ、現実にも、首席で外交官試験に通ると米国、中国、ヨーロッパ、ブラジルに赴任した。そして夢がついに実現したと彼が書くことが出来たのは、前述のように、ここ日本であった。いわばこれまでの人生の集大成の作品『繻子の靴』を日本で完成させて、宇宙征服の野望を実現させたと実感できたのである。[注5)]

では、このコンキスタドールによる世界制覇の野望の実現という意図は、『繻子の靴』までは表現されなかったのか。答えは否である。世界を制覇したいという野望を表現することは、若き日にすでに始まっていた。そのヒントは先

*人間総合学群 人間文化学類

の日記冒頭にある1894年の劇『黄金の頭』という作品である。もう一つは日記や『私の故郷』でも言及したように、パリから外の世界へと通じていったことである。1898年に休暇で訪れた日本という外の世界で、コンキスタドールにつながる貴重な経験をした。そして散文詩「松」「森の中の黄金の櫃」「散策者」「そこここに」等を著した。

劇『黄金の頭』を征服者のテーマからとらえるのは、おれの国を作りたかった若者を主人公とするから当然であるが、日本での散文詩が征服者のテーマから論じられたことはない。しかし両作品の時間の差は僅か４年である。これらの散文詩には『黄金の頭』と同じく、征服者への考察も宇宙（万物）とのつながりも金色への高揚も見られるのである。

本稿では、『黄金の頭』におけるコンキスタドールの世界制覇のテーマとは何かを考察し、それがどのように日本旅行においてもクローデルの観察に反映されて、散文詩に表現されているかを検討したい。

２　『黄金の頭』における征服者のテーマ

『黄金の頭』には、1890年の初稿と1894年出版の第２稿があるが、本論文では第２稿を扱う。初稿は無記名であり、第２稿は手を入れたうえに、日本旅行に時間的により近いからである。

ところでクロ―デル自身、『黄金の頭』、『真昼に分かつ』（1906年刊）『繻子の靴』（1928年刊）の３作が、彼の戯曲の鍵であると認めている。[注6)] 今回は第１の戯曲に注目するが、これら３つの戯曲によって、クロ―デル自身の個人の問題が次第に解決され、カトリック者としての召命も深まっていく。出発点とも言える『黄金の頭』では、征服者になりたい王は若く未熟で、征服者の死で劇は終わる。クローデル自身が『回想録』で、「宇宙を求める情念の受難劇」と評する。[注7)]

まず登場人物と三部仕立ての構成を確認し、そのあと、この劇でのテーマを探りたい。

２－１）登場人物と三部の構成

登場人物は群衆や兵士も含め多数いるが、ここではテーマと最も関わる４名、（シモン、セベス、皇帝、王女）の行動を劇の三部構成に従って述べる。

まず主人公は、衝撃的なタイトルにもなっている Tête d'Or 黄金の頭、その人である。第１部ではシモン・アニェルという放浪の若者、第２部では黄金の頭、第３部では王、国王と呼ばれ、その呼称が彼の成長と出世を示す。男性であるが、金髪を長く伸ばして振り払うシーンもあり、女性の属性もはらむ。

第１部でシモンは放浪から帰り、父で教師と慕う大樹の前で自我を目覚めさせ、権力と栄光を誓う。第２部で黄金の頭は、荒廃した母国の兵を鼓舞し敵に勝利して帰還すると、無力な皇帝を殺し、国王となり、軍隊を率いて世界制覇に向かう。しかし第３部で国王は、コーカサスを越えた砂漠でアジアの遊牧民に敗れ、部下は彼が死んだと思い身体を担いでコーカサスに戻ってくる。まだ息のあった瀕死の国王は、皇帝の娘を磔（はりつけ）という悲痛な状態から救い、彼女を女王にせよと命じる。夕日に向かって「おれを飲み尽くせ」[注8)] と叫び、自らの意思を純化させて息絶える。

次にセベスは、シモンの年下の友で、第１部でシモンの力を頼みに兄弟の契りを交わす。しかし病に伏し、第２部で、凱旋した黄金の頭に人間の存在理由を問いながら死ぬ。セベスの死により生じた恐怖心から、黄金の頭はますます征服欲を増したのである。

皇帝は第２部に登場するが、無力で、国は荒廃し、宮殿も秩序を保てない状態である。その

とき、黄金の頭が勝利をもたらす報告と共に凱旋した。喜びも束の間、皇帝は国を彼に譲らなかったために殺される。

最後に皇帝の娘、王女も第２部から登場する。美しい王女ですらも宮殿の荒廃と虚無を救うことは出来ない。父を黄金の頭に殺された王女は、黄金の頭に死を予言し、去る。第３部では山中にボロ姿で逃れて、たまたま進軍している国王から、彼女と気づかれずにパンなどを施される。しかし一行が去った直後、脱走兵にパンを取られ、森の木に磔刑の形で手に釘を打たれ固定されてしまう。しばらくのち、アジアで敗れ瀕死の状態で戻ってきた国王が、王女の苦しみの声に気づき、弱った王女の手の釘を抜いて解き放ってくれる。息を引き取る国王と言葉を交わし、女王になる。しかし、戴冠した女王も王に接吻したあと死ぬ。部下たちは、女王の遺体を西方の国、黒いもみの木の林の方へ連れ戻っていく。そして、劇は終わる。

以上、登場人物の特徴と劇のあらすじを追った。次に、この劇に出てくるテーマについて考えたい。

２－２）征服者劇のテーマ

本劇は、征服者になりたかったが挫折したシモンこと黄金の頭の物語である。そこには、①大樹と大地、②黄金、③世界制覇の欲望とその挫折という３つのテーマがあると本稿では考える。

２－２）－①　大樹と大地

３つのテーマの中でも「大樹と大地」は、「垂直方向と水平方向」および、「父と母」というテーマとも重なる。引用しながらこれらのテーマを考察する。

どんな人とも一緒にいることが耐えられない子供のシモンは、「ある一本の樹」に出会い、激しく抱きしめた。その樹はシモンにとって「父親、教師」であった。第１部で、放浪から戻ったシモンはセベスとその大樹の下に来る。

> おおいなる樹よ、おれを迎え入れてくれ！（…）おお、見事に揺るぎない父よ！おれを、お前の蔭に、もう一度取り上げてくれ、おお大地の子よ！[注9)]

こうして、父に助けを求める。そして、その大樹の父は、根を張り大地の恵みを汲み上げ、無数の枝でもって、太陽と星々を運行させる天をつかむ大きさを持つという。すなわち、

> 大いなる樹木よ、（…）お前の、老人ながら、なんと旺盛に、大地の乳を吸うことか、（…）無数の枝のこの口で、息づくものことごとくをあげて天を捕らえる。
> 大地と天とのすべて、お前が真直ぐに立つためには、そのすべてが必要なのだ！[注10)]

つまり、大樹の父は天と地をとらえているからこそ真直ぐに立てるのだとみる。そして、いよいよ、自分も父のように垂直に立つという宣言を放つ。

> 同じくおれも、おれも立つのだ、真直ぐに！（…）唯一無二の垂直にそそり立つ者でなければならぬ！[注10)]

その言葉を聞いたセベスが、「人間ならざる者の何らかの命令が、意志が」シモンを駆り立てていると言うと、シモンは「一陣の精霊の風が吹きつけ」たのを感じ、「一つの力が与えられた、きびしく、荒々しい力」「雄の激しい怒り」[注11)]を有することになる。こうして人間を超えた力を得て、権力欲に突き進む垂直に立つ男が誕生

した。大樹の父が天と地をとらえるように、すなわち地下に根差し上に伸び垂直に立つように、シモン自身もまさに垂直に立つのである。力強く天と地とをつかもうとする。

一方、年下のセベスが彼に兄弟の忠誠を誓うと「おれを敬うがよい、こうしておれたち二人、今は一つに存在している」[注12] とセベスに語る。ゆえに、猛々しい男性でありながら、セベスの抱える不安や大人の前の状態という繊細さもシモンは含むことを示唆する。そして当然のことながら、真直ぐに立つためには、父の大樹と同じように、大地の乳を飲まねばならぬ。母の乳である。つまりシモンにとって、大地という母が、大樹という父に加えて重要になる。

そして第一部の最後にシモンは、「行動だ！行動するのだ！」[注13] と叫んだあと、「行動の力をおれに与えてくれる者、それは誰か？ああ！ああ！」と問い、大地に腹ばいに横たわる。

> おお夜よ！母よ！（…）今こうしておれは横たわった、お前の乳房の上に！母なる夜よ！大地よ！大地よ！（失神する）[注13]

このようにシモンは母に呼びかけ、失神して第１部は終わる。埋没の動きである。

こうして、「大樹」が「父・男性」で「大地」は「母・女性」という対比項目が明確に示され、第２部での女性のテーマの導入となった。それは一つには、シモン自身が長い金髪という女性の属性を有することと、もう一つは無力な皇帝の娘、美しい王女を登場させ、美しくとも国は救えない虚しさを見せることになる。

舞台登場の順に述べると、荒廃した王国の宮廷では無力な王が嘆いているばかりで、見張りたち臣下も敵との戦いに悲観的で、すべてあきらめている。そこに王女が登場するが、誰も敬意を払わない。劇中劇かと見まがうほどの美しい姿で再登場するシーンでは、王女がその美貌の下、金と赤の衣装に長い黒髪を見せていても、宮廷内の人々も外の会衆も、希望を持つことはない。ただし、王女は女性のテーマとして重要な発言もする。すなわち、眠りの国の女性は鈴蘭と苺の花の間の領分内にいて、眠覚めると小鳥のように歌い、天に昇る声で舞い上がりたく思うが、それもできないと。作者クローデルは、男性を大樹にたとえたのに対して、女性を草花あるいは果実といった植物にたとえ、舞い上がる小鳥にもならせず、大地にとどまらせる。第１部の最後にシモンが腹ばいになって、大地の乳を欲したのと同様である。樹の父は垂直に伸び上がる。草花の母は水平の大地から動かない。

さらに、王女には金貨と永遠の恋を探す発言もさせて、第３部の劇の大団円を示唆する。すなわち、磔刑からおろされた王女は、劇の最後に黄金の頭から金の杖を受け女王になり、永遠の愛を示す。しかしその女王も亡き黄金の頭への愛の接吻によって死ぬ。ただし、女王の亡骸は母国に戻るので救済を得ることになる。

２－２）－②　黄金

シモンが国王になるときも、磔刑から救われた王女が女王になるときも、王冠と金の杖を有することによってその地位につく。王であることを象徴するのは、金である。

そもそもタイトルが『黄金の頭』なのだが、人物呼称としての「黄金の頭」は、第２部で凱旋した「シモン」のことを、セベスが「黄金の頭」と呼ぶところから始まる。そして、「黄金の頭」が第２部の主人公の名となる。最も印象的な場面は、セベスの死後、恐怖心から征服欲を高め、自分一人で帝国を築き上げると宣言して、自分が君臨することを周囲に示すシーンである。

「黄金の頭」は、長い金髪をほどき、その頭

を振り回す。歌舞伎の獅子舞にもあるが、それは舞台に映え強烈な印象を与える。同時に、長い金髪とはふつう女性の属性であるので、女性の属性を主人公に持たせる。ちなみにもう一つ女性の属性を示す発言を主人公はする。自分の王たることを宣言するとき、平原、山、川、林によって、「王者、父、正義の幹、知恵の座と呼ばれるであろう」[注14] と。　ところで知性についてクローデルは女性が司るものとみなしているが、それを黄金の頭が所有する。女性で表される知恵をも、黄金の頭は持つ。すなわち、男女の属性を問わず、あらゆるプラスの面を持つ、オールマイティさを黄金の頭に所有させる。黄金の髪の上に黄金の冠を載せるシーンは、圧巻である。

しかしこの輝く髪をもった主人公は、第３部でヨーロッパからアジアに進軍し、そこで敵に敗れ、倒れる。部下に死んだと思われた体はコーカサスに戻ってくるが、そんな瀕死のシーンでも、「国王よ！おお、この髪の毛」と部下は叫び、「髪に櫛を入れる」[注15] ことにより、王の象徴をいとおしむ。部下にとっても、黄金の頭の持ち主であるからこそ主人公は王なのであった。輝くのである。王冠の輝き、黄金の王杖は、いわばどこにでもある王の象徴といえるが、黄金の長い髪はこの劇の主人公だけのものである。

２－２）－③　世界制覇の欲望とその挫折

黄金の頭の征服欲と挫折については、①②でも触れているが、もう一度整理する。

第１部で、大樹の前に父のように垂直にそそりたつシモンは、一つの力を与えられた。このときその強さを示すために高く燃え上がる赤い炎が加わる。これまで淡い鬼火のようにさ迷い歩いていたシモンは、「今や、しっかりと根を下ろした炎となって、おれは高く燃えた立たねばならない」[注16] と、はっきり「炎」として上昇する。垂直にそそり立つ英雄は、炎となって天にまで向かう。太陽が意識されたダイナミックな垂直方向が示されている。

主人公が、人間を超えたと考えたこと、垂直に立ち、炎と共に天まで届くばかりの勢いを持ったこと、これらは強者のあかしである。

さらに第２部ではセベスの死の衝撃から、より強くなることを決意する。「おれ」の帝国と主張し、神のように威張る気違いであるとの評判の通りになっていく。かれの征服欲の表現は多数あるが、「すべてを所有し」、[注17]「天を焦がして立ち上がり」「おれはおれの場所をつくる」[注18]「すべての人間の意志を超えた高みにまで昇ってみせると誓った」[注19] とまで言い放つところが代表的である。その目的は、この地は狭いから世界に踏みだし、力によって所有することによって、あまねく世界を知り、おれの場所で自分たちの真の団結を見出すことである。[注20]

そして第２部の終盤のシーンで、自ら戴冠する。

> 現実に存在するがままの万物の名において、真実と原因の名において、まさに、この冠をおれはおれの頭に戴く。[注21]

黄金の長髪の上に、黄金の冠が戴かれた。黄金を重ねて手にした最強の征服者である。

こうして、黄金の髪を有する黄金の頭は、第２部の最後では、太陽すらもしのぐほどの勢いと輝きを有する。「おれの時が始まったのだ！おれの栄光は、虹のように世界の上にかかるだろう、見る者に、新しい一日を告げる虹の橋だ。（…）太陽よ、神にもまごうきらめく綿毛のうちに、お前の顔を隠すがよい。」[注22] と。じっさい、第２部、黄金の頭が舞台を去った後、「黄金の頭！」という歓声が聞こえると、轟音と共

に外で放たれた大砲の煙が大広間に満ちて、「大広間いっぱいに、日の光が射し込んで来る」。[注23)]

黄金の頭こと国王は、天へも昇る勢いで、金髪にかけて輝くものを両手に掲げ歩を進めていくと宣言する。先ずはヨーロッパで東へ進み、切り立った山を越え、勝利を重ねながら前へ前へと進軍していった。

しかし第３部の舞台、コーカサスにおいて、この征服は転換点を迎える。カスピ海と黒海にはさまれるコーカサス地域は、ヨーロッパとアジアの境目である。太陽の沈む西の国から太陽の昇る東の国へと向かってきた彼らは、アジアに阻まれる。遊牧民族の大軍に負けを喫した。

ところで、天界から火を盗み人間に与えた廉（かど）で、プロメテウスはここコーカサス山脈でゼウスから磔刑の罰を受けた。その同じコーカサスの東側で、本劇の国王も糾弾された。なお、王女が磔刑の形で樹に固定されていたのも、この神話にちなむ。若いシモンは黄金の頭としてヨーロッパの国王になったとしても、天まで昇る炎のごとく自らの力のみで太陽になろうとして、ここで挫折したのである。自らを人間以上の能力と信じて挫折した。しかし、瀕死の黄金の頭から王の地位を引き継いだ王女は女王になり、「あなたの憩いは、永遠不変の黄金の光のうちに！」[注24)]と告げて黄金の頭を助ける。いわば、彼は王女を磔刑から救って王の地位を彼女に与えることで、死後の自己救済をえたのである。「愛よ、火よ、底知れぬ深みよ、黄金よ、金よ、おれを飲み尽くすがよい！」[注25)]と言って、自らの意思の純化につなげた。

後の『繻子の靴』の主人公ロドリーグと比べると、ロドリーグは神の国を拡げるために制覇を目指し、片足も身分も失うが、失ったことによって救われた。それは劇中でも明言される。修道院に拾われてシスターの靴を磨きながら穏やかな晩年を生きていく。魂は救われ、死んではいない。しかし黄金の頭は、「おれの」国を所有できると自己を過信して、太陽と、神と並ぼうとして、死に至る。たとえ最後に王女に王位を渡し、接吻を受けたとしても、それは死後のことである。救われるか死ぬかという相違は、やはりクローデルの30年の円熟である。

このように20代のクローデルは、本劇『黄金の頭』に、父なる大樹と母なる大地に培われ、黄金をまとうことによって一層強くなった若者の、世界征服とその挫折を表現した。そして彼自身も、この強い若者のように、パリに出て、海に出て、世界へ渡る外交官となっている。もちろん執筆に際して、当時の世界旅行雑誌の刺激や姉カミーユ・クローデルの影響もあったが[注26)]そもそも19世紀後半という時代の背景がある。グローブ・トロッター、世界漫遊家の時代であり、万国博覧会は世界中の驚異の品々を見せ、世界旅行のためのガイドブックもイギリスのマレー社を中心に刊行された。

その中に生きる若者が、訪問先としてかねて望んでいた先が、日本であった。日本への最初の旅行は、中国赴任中の1898年に実現された。『黄金の頭』の第２版刊行からわずか４年後のことである。

３　『黄金の頭』の作者がみた、1898年の日本

20代最後のクローデルは、1898（明治31）年６月、横浜に上陸して３週間をかけて、日光、東京、静岡、京阪を回る。その経験をもとに散文詩をいくつか執筆する。その折の眼差しはまさに黄金の頭シモンのものとも考えられ、興味深い。

本章では、この散文詩を参照しながら、大樹、日本のコンキスタドール家康を祀る東照宮、詩人としての召命、金色の衝撃の順に日本でのクローデルについて考察したい。取り上げる散文

詩は「松」「森の中の黄金の櫃」「散策者」「そここここに」であるが、彼の旅のメモ帳 *Les Agendas de Chine*（以下、*Agendas* と略す）および、携行していた『日本旅行案内』*A Handbook for Travellers in Japan*（以下ハンドブックと略す）も参照する。

３－１）樹木と垂直とうねり

最初に、東海道線の車窓からみた松並木と散文詩「松」について考えたい。日本旅行の始まりは、横浜から東京に向かうときに見た、松並木の考察だったからである。

クローデルの携行したハンドブックは、第１章が「東日本」、第２章が「中央日本」、第４章が「西日本と瀬戸内海」という構成になっており、第３章に、「東京と京都をつなぐルート」として、東海道、中山道、横浜から神戸の船という３つ手段を紹介する。その東海道のページに、松並木への言及がある。「美しい松並木の街道は、いまも多く残り、時には汽車の座席の窓からも眺められる」[注27] と記される。さらに、かつての江戸時代の往来の賑わいも十分に説明している一方、街道自体は今や人通りがなくなったと伝える。[注28]

こうしたガイドブックの情報で興味を持ったうえで、東海道線の車窓で、松並木を観察した。『黄金の頭』で大樹を父として、垂直性を重んじたクローデルは、幹のうねる様子も枝を左右に伸ばす様子も良く見える、針葉樹の松並木を見逃すわけにはいかない。

散文詩「松」の冒頭、「樹木だけが、自然において、人間と同じく、垂直である」[注29] と宣言する。まさに、シモンが父の大樹に認めた強者の特徴から、日本での第一作は始まった。続いて根や枝や葉の機能と意味を人間と比べながら述べ、樹の感動的な戦いのドラマを讃える。

ことに、東海道での海を前にした松並木の姿にクローデルの観察は集中する。大気の圧力にも海風にも幹をくねらせながら抗い、石ばかりの地味に根をしがみつかせて耐えて生きている松である。松はいまや一本一本が姿を持ち、環境と戦う戦士となっている。「この荘厳な海岸線で、今日夕暮れ時、私は英雄的な隊列を閲兵した。あらゆる波乱がみられる闘争を視察した。」[注30] 一本一本の松は、一兵卒も「巨人たち、王たち」も、激しく動く敵と戦い、ヘラクレス的な力強い働きをするとクローデルは見る。神話的な道具立てを与える。そしてその姿は、黄金の頭が王となって、剣をかかげ隊列を従えて戦うイメージと重なる。もちろん、黄金の頭は前へ前へと進みコーカサスまで至ったが、この松の戦士たちは動けない中で、幹をくねらせながら、戦っているのである。人間として戦う劇の中の人物たちと、海風と戦う実際の松の姿。イメージを重ねながら、クローデルは、単純な比較では片付かないさらなるものを読み取った。すなわち、黄金の頭はアジアで敗れて敗走したが、４年後にその作者はアジアの日本で、巨人や王や一兵卒の配下たちが必死に戦闘しているかのように、松という針葉樹が幹を曲がらせていることを発見し、松の戦闘ぶりに決して屈さない崇高さを読み取ったのである。したがって松は小道具でも人形でもなく、主役として屈しないという崇高さを示している。象徴主義のマラルメの火曜会に通った若者はやがて、それは何を意味するか？と問いながら、世界を把握していくことになる。[注31] そうしたクローデルの先駆的な観察と思索をここに発見することが出来る。

しかもこの散文詩は、やがて東海道の松並木だけでなく、日本の各地の松にも触れ、皇居のお堀端に傾く松、夕暮れの富士山と重なる松で終わる。

富士山が巨人か処女のように「無限」の澄み切った光の中に君臨して見えるあの夕べには、一本の松の黒い房が、キジバトの色をした山と並んで立つのである。[注32)]

『黄金の頭』は劇の第１部で大樹にすがり力を得るところから始まったが、日本での若きクローデルは、単なる戦闘による所有でなく、また単に上に伸びれば把握は叶うというわけでもなく、コンキスタドールとして松に思いきり戦わせてから、英雄的なうねりに崇高さを持たせた。そして暮なずむとき、葡萄色と灰色の混ざる富士山という日本の風景に、シルエットとしての松の黒い影を印象的に重ねた。25年後の大使時代、自然に神性を見る日本文化に間近に触れることにより、クローデルは神からの召命を自信をもって果たしていくが、今回、松に崇高な精神性をみたのは、その先駆とも言えよう。すなわちこの松の崇高さの気づきは、各々の意味を探り、障壁をなくし世界を一つにするコンキスタドールとしてのクローデルを予感させる。

なお、樹に対する観察は絵画にも及び、京都訪問時にさらに展開する。この点については本稿では３－３）で言及したい。

３－２）日本のコンキスタドールを祀る東照宮

携行したハンドブックの冒頭部分には、Cerebrated Personagesという日本の有名人紹介があり、イエヤスも含まれる。[注33)] そして同ガイドブックの日光の説明から、６月１日と２日に大例祭があることを知り、日本のコンキスタドールの大例祭を見に、クローデルは東京から急いで直行する。[注34)]『黄金の頭』の作者としては、日本のコンキスタドールが祀られいると知れば、訪れたいと思うのは当然である。そして散文詩「森の中の黄金の櫃」が書かることになった。汽車に乗りこんだクローデルは、ガイドブックにあるイエヤス情報も読み返したに違いない。そして車窓観察にいとまがない。ことに、宇都宮を過ぎて、山間部に入りむき出しの自然が迫ってくるのを食い入るように見つめた。

私はひとめで地形を見てとった。奥深くに暗い森と重厚な山襞、前方にはいくつもの丘陵（…）。汽車が切通を抜けていくと地層があらわになる。まず、石炭のような黒い腐植土の層、ついで、黄色い砂、そして硫黄か辰砂で赤みを帯びた粘土。[注35)]

ヨーロッパの森を進軍して高い山をも越えた黄金の頭だからこそ、人を寄せ付けない険しい山岳地帯に興味を持ち、さらに後年の大使時代には、この険しさこそが、日本人の自然への恐れを生じさせる原因であると考えるのだが、[注36)] 折しも天候まで暗雲が立ち込める状況である。自然の脅威を表す手段としてますます効果的である。

ただ、この野性的な自然は、ここでは地獄となる。勝利のための征服対象ではない。すなわち、「地獄が私たちの前に開かれ、繰り広げられる。」[注37)] これらの苛烈な地形が「暗黒で虚無の底に照応する。」[注37)] つまりここは暗く何もない地獄である。ゆえに、「将軍イエヤスは王者の知恵によってこの地を選んだ。」[注37)] なぜなら、イエヤスは、死者となった「彼が戻る闇に木陰を重ね、彼の沈黙を木々の暗闇に溶け込ませることによって、墓所が神殿となるように、死者から一人の神に変貌を遂げる」[注38)] ことができるからである。死者はこの地の暗く沈黙を保つ暗闇の木々のおかげで、物質性のない、俗を超えた聖なるものに変貌する。そこで、次の文が存在感を放つ。

杉の森こそが、実は、この神殿なのだ。[注38)]

杉の森が俗から聖へと変換する場、神殿となる。東海道で観察した松と植物として近い杉を分析してから、この杉の森の世界を「限るものはないが同時に閉ざされた空間で、すべて準備されていると同時に不在である。」[注38)] と定義する。従来の西洋の理論とは矛盾するが、大きく広がる大樹林の自然が、本堂という閉ざされた空間の神殿となり、絶対的な神は存在しないながらも、超越者の啓示は準備されている。黄金の頭が人間を超える力を得たと思い込み、絶対的な神の存在の前に挫折したのに対して、日本訪問者となったクローデルは、自然の中に一つの神を見る日本の文化規範に気づく。松に崇高さを発見したときと同じく、日本という新しい世界で、マラルメの火曜会の経験者は、杉の森の意味するものを問うことを始めている。

翌日、東照宮を訪問する。「浄めの水を口にふくみ」、「夢の扉のように、錯綜する花々と鳥たちからなる」[注38)] 陽明門をくぐる。靴を脱いで金幣と鈴のあるお神楽も受ける。本社を囲む垣根のきらめきも目にとめる。「横手の壁面は、日陰にあっても、一面に華やかな輝きとなって発光する」[注39)] と。

煌めく建物群を経て森の神殿の奥へと歩を進めていくうちに、クローデルは、日本人は海洋民族であり、日本は海に浮かぶ島々であると捉えて、東照宮の建物群を、l'arche（箱、箱船、契約の櫃）という。タイトルそのままに、森の中に浮かぶ金色の櫃である。[注40)] フランス語でl'arche は、人間と動物を救うノアの箱舟であり、また、旧約エホヴァの神殿の聖櫃（十戒をおさめた契約の箱）の意味もある。[注41)]

その櫃 l'arche の中心である本社の中に、黄金の頭の作者は、いよいよ入る。ここまでの散文詩は色彩で言えば、黒、金、赤で展開してきた。初日の天候も地層も含めた暗闇の黒、ことに杉の原始林の暗がりと冥界の闇が入り混じった暗闇、翌日の陽明門や間垣での光り輝く金色、漆の施された朱色を中心とする色彩の乱舞。思えば『黄金の頭』での王女の劇中劇の衣装にも通じる色を用いながら、観察と考察をクローデルは続けてきた。では中心の建物、本社の中には、いかなる存在があるのか。

内部ではまず、精緻を尽くした人工の匠の技に圧倒される。杉という自然が広がる中で、建物自体は、外側以上に内側の室内も、彫像と絵画と漆で埋めつくされる。「色彩が木材を覆い飾り、漆は不可侵の水の流れの下にそれを沈め、絵画はおのが妖術のもとにそれを覆いつくし、彫刻は深く切り込んで、それを変容させる。」[注42)] これらの人工性に加えて、最後に金色がまたしても登場する。神への変貌を遂げさせるのは、金色の輝きこそである。建物の外側面は先にも述べたように横側も金色で輝く。そして、内側である。「櫃の内側の６つの壁」もひときわ輝くのである。「内側の６面」とは、部屋の中の上下左右正面背面の６つの壁である。

６つの壁もまた、同じく秘宝の輝きに彩られている。不変の鏡に映し出される不在の炎に。[注43)]

ここには、今までの外側の金色を見ていた時とは違った想いが読み取れるのではないか。内側の６面の壁は、「秘宝の輝き」である。しかしそれは自らが輝くのではない。鏡に映し出されたものが反射しているだけである。では鏡は何を映しているのかというと、それは「不在の炎」である。つまり、存在しない炎なのである。光源となる中心の炎はないのである。この空虚が、死者を一つの神へと変貌させる秘術の完成した姿である。

そして住まいについては、将軍は森に住んでいるのではない。彼の住まいは、「森のただ中の落日の栄華」であり、「かぐわしい靄が梢にたなびいて住処となる。」[注43] つまり、衰微していく落陽の栄華と、梢の下に漂う靄の香気を、神へと変貌の秘術を遂げる住まいとする。不在の炎と同様、消え去っていく光と香りである。

では、こうして東照宮の秘儀を読み解きいてきた『黄金の頭』の作者は、納得するのであろうか。日本の文化規範を彼なりに気づき始めるが、この地の征服を実現したと思うのであろうか。

森を神殿とすること、建物群を森の大海に浮かぶ箱舟とすること、多彩な装飾とその輝きを建物の外側にも内側にも施すこと。これらは、征服者の王としても納得するし、散文詩に明と暗を与え、詩的空間を作ることができた。しかし、中心となる炎が不在という虚しさは、いかがなものか。しかも、鏡に映る不在の炎と同じように、住まいも、輝きを次第に失い、香りも消え去る。空虚感と衰微の状態で、変身の術を遂げているのではないか。ここに、キリスト教徒クローデルの東照宮への距離感が感ぜられる。

もちろん、征服者として納得はせずとも、死者が一人の王になるという秘儀は新しい文化規範として読み解いた。タイトル「森の中の黄金の櫃」は、「森の中」という杉の空間も、「黄金」で飾る精緻で豪華な迫力も、「櫃」としての秘儀の場所も、死者となった日本のコンキスタドールの死後の神殿を見事に表現している。

さて６月２日に杉の森という神殿を訪問し、３日に金幣祈禱式に出席したクローデルは、もっと森の中を探索したくなる。翌日、６月４日は、雨にもかかわらず山中を散策したおかげで、貴重な経験が待っていた。コンキスタドールの自信を明確にする経験である。

３－３）詩人としての啓示

クローデルは６月４日、中禅寺湖に向かって、雨の中禅寺坂を散策しながら登り始める。そこで、散文詩「散策者」および後の「詩法」の記述へとつながる経験を得る。

現在では、東照宮のある山内からいろは坂の上にある中禅寺湖往復を日帰りで歩こうとはまず考えないが、1898年はそれを試みようとしても突飛ではなかった。

第一にクローデルも携行したガイドブックの推奨である。日光近辺といえば美しい中禅寺湖であり、女性は人力車としても「日光から日帰り徒歩往復は素晴らしい遠足である。」と薦めている。まして、「訪問シーズンはいつでも魅力的だが、ことに５月末や６月初めがベストである。つつじの花が赤、白、紫と咲く。」[注44] とまで言われれば、この６月に山を歩こうと思うのも不思議はない。

第二に、1898年の日光山内は、すでに多くの外国人を迎えていたので、中禅寺湖畔が注目されていたことである。二社一寺の参拝者数でいえば、前年の1897年は日本人が81,515人に比し外国人が5,421人で、その４年前1893年に比すと倍増している。[注45] その外国人と日本人の山内での混雑を避けるために、在京の外交団たち、例えばサトウ英国公使、ダヌタンベルギー公使は湖畔に別荘を構えるなど、中禅寺湖は通な在京外国人を惹きつけていた。同じ外交官のクローデルが興味を持つのも当然である。

第三に、実際の条件が揃っていたことである。坂道自体がつづら折りの新道(現在のいろは坂)になり整備された。1894年湖畔にレイキサイトホテルが開業した。このように、外国人旅行者として交通手段や宿泊施設も整い、観光の面からも準備がなされていた。

しかしこの日、「泥棒にあったかと思うほどのびしょ濡れの、激しい雨」[注46] であった。そ

れでも坂を登ろうとする最大の理由は、たとえ「目的も利益もなく」と書いたとしても、森が神殿である聖山を探索したかったからではないか。順に読み解きたい。

クローデルは「節くれだった杖を手に、ビシャモンの神（毘沙門天）さながらに（…）目的も利益もなく」[注47]、夕闇せまり、嵐をはらんだ空の下、新緑の山中を一人さまよい歩く。ビシャモンになぞらえるところから、この散策が日常を離れた神秘的空間であることを予感させる。その散策者が森の中で見聞するのは、椿の葉から落下したしずくと、つややかな光る苔との、打ち明け話である。水滴と苔が話をする。それに驚いた「世慣れぬ山羊の私は」逃げ出し、「木々や花々のようにひっそりと立ち止まって、」[注47] 遠いこだまに耳をそばだてる。雨の合間の小鳥のさえずりを楽しむ。

散策者はもはや人間ではない。森の小動物の一つとなる。動物、植物や水滴の想いまでわかる森の万物の一つとなり、互いに交感する。あるいは、少年クローデルが感動したランボーの『イリュミナシオン』において、洪水の後に登場する兎のイメージにも重なる。そして発見する、「どの樹にも個性があり、どんな小さな獣にも役割がある」ことを。そして宣言する、私は「音楽を理解したよう自然を理解する」[注48]と。

しかし、この若者は生き物として互いに交感し自然を理解しただけでは満足しない。万物共生の歓びに打ち震えるだけではない。むしろ、共生を生じさせる側になる。生き物のつながりを、「私の眼差しこそが、密やかな親近性を証明し、始原にあった計画を再構築する」[注48]のである。万物の諧調の中に組み込まれるだけではなく、それを再構築し、実現するのである。数年後、『詩の原理』の一節で次のように振り返る。「かつて日本で、日光から中禅寺へと登っていったとき、私が見たものは、楓の緑が松の木の差し出す諧調を満たす姿であった。楓と松は互いに遠く隔てられていても、私の眼差しによって、一直線に並置された」[注49]ことに気づく。「二つの相異なるものが、同時に結ばれて現存するという事実」[注49]を確認した。ここに、楓と松とを見つめて、両者をつなげた私は、「現存する事物の確認者」[注50]という特命を帯びた人物となる。散策者から「検査官」[注50]となる。自分の「眼差し」によって、生き物を結び調和させる。これはまさに、神の創造の摂理を助けるという特別な召命である。「おれの国」を作るのではなく、「おれの」眼差しによって、人間を超えた神の助けをする。おれの眼差しが、神の意図を実現する。

これが、黄金の頭の新たな発見である。おれの眼差しで、万物共生を実現する。武力、炎、黄金の髪で天に昇ることを画策して、結局は挫折した戯曲から数年を経て、神の助けをする。己への召命を発見して自信を得たのである。これは、若いコンキスタドールにとって、大きな成長である。啓示とも言えよう。

なぜ、この日光の森の中で召命を受けたのか、それは次のような段階を踏む。

まず、小動物になって万物との共生を感得できたのは、前々日の東照宮体験による。東照宮の建物群には、彫刻、絵画、うるし、金を駆使して、徳川の威光をかけた人工の技が集中しており、同時に想像の生き物も含めたあらゆる動植物も唐子たちも賢人も精緻に刻み込まれ描かれる。その多様で集中した建造物から自然界に解き放たれれば、匠に作られた精緻な動植物が、実際の万物の一員となることはたやすい。見ている観察者も動植物の自由に飛び回るさまを見て、気づけば同じく万物の一つとなる。山羊となり、滴と苔の打ち明け話を聞く。

さらに、この地の特有性であるが、聖山という認識である。東照宮や近辺の寺社や民間信仰

の社を見て回る訪問客は、日光ではいにしえから日光全体が聖山であると捉える。ロチの『秋の日本』に収められたエッセイの題名は「日光聖山」である。前日に裏見の滝などを訪問した[注51)]クローデルは、散文詩の冒頭で、四天王の一人である毘沙門天（片手に宝塔、片手に宝棒を持ち、山の中腹に住まって北方を守る神）という守護神に自分をたとえて、江戸の北方に位置する聖山を見回っている。四天王は帝釈天の助けをする。ゆえにクローデルは宝棒の代わりに杖をもち、散策の途中で検査官となって絶対神を助けることとなる。

最後に、実際に山の中に入って前へ前への進軍だけでなく、共生を発見したことである。万物の共生に身を震わせ、そのあと万物をおれの眼差しでつなぐ。面積の所有ではない。おれの眼差しによる万物の統合化である。それは神の所有であるが自分はその一助となる。眼差しという力を神から得て、神を助ける。これが新たな所有であり、世界把握である。コンキスタドールとしての自信が生まれた。

日光から東京に戻ると、箱根、静岡を経て京都まで、コンキスタドールは眼差しでもって日本を観察していく。そして京都では、今回日本で見た中で一番美しいものに出会う。それは西本願寺の障壁画なのであるが、二条城（当時、宮内庁管轄で二条離宮）での松と黄金との出会いを経たのちのことであった。*Les Agends de Chine* と散文詩「そこここに」を紐解きたい。

３－４）大樹と金色の衝撃と

クローデルは６月14日に静岡を発ち、夜行列車で京都に向かう。円山公園近くの弥阿弥（やあみ）ホテルに宿泊し、15日と16日の丸二日間で、十数か所を訪問した。一日目は御所から始めて金閣寺、大徳寺、清水寺、三十三間堂、博物館、東本願寺などを、二日目は二条城から始めて、東寺、西本願寺、孝明天皇陵、銀閣寺、南禅寺などを訪れた。美術では障壁画への関心が強く、その発見と吟味についやした。[注52)] 本稿では、障壁画のうち、二条城（当時、二条離宮）と西本願寺への言及に注目する。日光で黄金と出会った『黄金の頭』の作者が、京都において、どのような金色と出会ったのか。また、松を東海道やお濠で観察したクローデルは、京都でも松とまた出あったのか。

「そこここに」には日本旅行の後半の印象、ことに芸術的論理と仏教についての考察が記されるのだが、その初めに、すなわち第２段落で、西洋と日本の芸術家の違いを論ずる。[注53)] 西洋の芸術家は「自然をコピーする。」自分の主観で作品にしているに過ぎない。しかし、日本の芸術家は「自然を模倣する。」 自然に内在する本質を把握し簡潔に表現する。さらに散文詩中頃[注54)] で、日本の障壁画について「開かれた窓」という持論を展開してから、御所と二条離宮に言及する。日本の障壁画や襖絵は部屋の「開かれた窓」であり、画家は「開かれた窓」に光景の本質、彼が思うヴィジョンを表現する。つまり、冒頭で述べた日本の画家は本質を把握してそれを描くという理論の延長である。だから、室内には、想像の開かれた窓は幾つも増えていく。その部屋で、「私は鑑賞者ではなく、部屋の客人となる。」[注54)] という。

御所訪問の翌日、クローデルは二条離宮の「客人」となった。ハンドブックに「内部が黄金の美の白日夢であり、櫓と石垣を備えた実に見事な日本の城の例である」[注55)] とあり、金色の内部を備えた城への関心も高まった。この障壁画の「開かれた窓」に、何を見たのか。

二条城二の丸御殿は現在、徳川慶喜の大政奉還の場として多くの修学旅行生を含めた観光客を迎えるが、1898年は宮内省の管理下で「二条

離宮」であり、許可を得ての訪問見学である。二の丸御殿の主な修復保護は昭和になってからなので、創建時のままの客人となった。

その日のメモには、「開かれた窓」の障壁画についての語句のみが記される。「基本となる金、竹と虎、実物大で羽目板からはみでる梢、隠された黄金の深淵につるされる、(…)、花開くリンゴの樹（桜のこと)、菊、すばらしい、幹だけの松」[注56] と。実際、狩野派による金碧障壁画という「開かれた窓」が並ぶ。二の丸御殿の構造を紹介すると、御殿は入り口から≪遠侍≫≪式台≫≪大広間≫≪黒書院≫≪白書院≫の棟が続き、それぞれが「一の間」「二の間」…と複数の部屋を有する。まず、≪遠侍≫では三つの部屋に、クローデルのいう「窓」に「竹と虎」が現れる。「勅使の間」でも檜の梢がはみ出て長押の上にまで真直ぐに伸びあがる。≪式台≫からは、松の大樹が登場して、一本の松が２枚の襖と長押の上まで左右上下に広がる。「窓」が複数になる。金色を背景に実物以上の大きさで、圧巻である。そして≪大広間≫で対面の家臣が座す「二の間」「三の間」「四の間」では、松孔雀図と松鷹図が左右上下の複数の「窓」にわたり、最も迫力をもって描かれる。将軍の間「一の間」では、むしろ少し穏やかに松と金鶏が描かれる。

こうした松と金の「窓」が複数展開する二条離宮を、クローデルは、「そこここに」で作品として７行ほど述べる。先ず、その直前で「清涼殿」を天空と水で満ちた空間と述べたのに対して、「宮殿の住まいはもはや黄金しかない」[注57] と明言する。対照を鮮やかに、この宮殿の金色を強調する。次は実物大以上の巨大な松についてである。金色の壁面に、松が天井の近く壁面全体で、また一枚の襖を超えて隣の襖に伸びる。「松のこずえは、太陽のごとく輝く障壁の上に、巨大な枝葉を拡げる。」最後はこの宮殿の王 le Prince が座す。コンキスタドールならば、金色の間に、誇らしげに満足げに座るのかと思うと、ここではそうではない。王が左右に見るのは、「黄褐色の炎の巨大な帯だけ」である。黄金の障壁画が火の塊にしか見えない。そして王の想いは、「夕べに浮遊して、荘厳な炉をとらえる」という。中空に漂い、黄金の火の帯を見て、業火を踏まえる。これが、彼のメモにあった、「黄金の深淵」につながるのではないだろうか。

金色が強者を示すものならば、金色を歓迎し讃えるはずなのに、その深淵にも気づく。日光の山中で得た神の摂理を助けるという高揚感ではない。むしろ、東照宮の本社でみた、鏡がうつす不在の炎や、最後に目にした落陽の耀きと重なる。この黄金への二重の想いは、その後大使時代、『朝日の中の黒い鳥』に所収される「太陽の深淵」でも語られる。またこの≪大広間≫の歴史的ドラマは主人公を天皇に代えて、同書の「松の中での譲位」に展開される。

さらに、複数の「窓」にわたって狩野派が「松」の幹や枝葉の塊を迫力をもって配置したことは、クローデルを惹きつけた。『黄金の頭』で大樹を父として仰ぎ、日本到着後すぐに松並木に松の崇高さを読み取ったクローデルならば、その隆起する幹と左右に上に伸びだす枝に強い関心を持つのも当然である。こちらも、大使時代の大覚寺での大樹『紅梅図』の考察に繋がるのである。[注58]

このように、二条離宮の≪大広間≫をはじめとする障壁画で、松の迫力と輝く黄金に接した『黄金の頭』の作者は、この日、二条離宮の次に東寺を、そして線路を越えてすぐの西本願寺を訪れる。この西本願寺も、狩野派の障壁画で名高い。*Agendas* から推察すると、≪対面所≫と≪白書院≫を訪れた。どちらも、渡辺了慶による障壁画である。[注59]

Agendas には「素晴らしい。二条と同じ障壁の効果、自然のままの大きさの松、竹。素晴らしい金で描かれた秋の景色―日本で見た中で最も美しいもの」[注60] と記す。二条の効果と秋の景色を讃える。なんという絶賛であろうか。先ず、二条離宮で見たのと同じく、黄金の障壁の上に描かれた実物大の松、竹の迫力に印象付けられる。これは、≪対面所≫の「金碧松鶴図」と考えられる。一本の老松は金碧地に極彩色で、それも横幅９間と長押を挟んで上下の襖に、壁面全面にわたって描かれる。実に大きい。一本の老松が、左右８枚の襖絵相当の紙幅で斜めに伸び、幹と枝を横に伸ばす。天井に届かんばかりの梢の緑の房も常緑ですがすがしく、荘厳さを増す。鶴が５羽ほど群がり、孔雀も遊ぶ。まことに、「二条と同じ障壁の効果」である。

その迫力のあとに、≪対面所≫の西隣に連なる≪白書院≫のおそらく「雁の間」と「菊の間」の秋の景色をみて、それは日本で目にした中で一番美しいと感動する。「雁の間」には、金碧の障壁に群雁が描かれ、長押をはさんで天井近く、壁面全体で雁の群れる様子が描かれる。透かし欄間にも雁が彫られた。「菊の間」の障壁画には、金箔を地としてその上に、あふれんばかりに白菊が咲き誇り、萩・ススキ・桔梗・りんどうなどの秋の草花が描かれる。白菊の花弁は盛り上げ技法で描かれるところもある。そのこんもりとした厚ぼったい白菊に、りんどうや桔梗の青が色を添える。竹垣を越えて見える秋の風情は、庭という個人のプライベート空間も想像させ、「客人」のクローデルは落ち着いた気持ちとなる。格天井には、扇面が金地に色とりどりで描かれ、半開から全開で舞う。扇を使う人に思いを馳せることも出来る。これらがすべて、「すばらしい金で描かれる」[注60] のである。やはり、秋の風景といった穏やかな対象に対しても、金はすばらしい。

「散策者」で万物を眼差しでつなげることにより調和させ、神の助けをするコンキスタドールを目指し始めたクローデルは、「そこここに」の第二段落で述べたように、日本の画家が「模倣する」とき、自然に内在する本質を松を描いた時のような迫力だけでなく、こうした金色で細やかな表現で描くことに感動したのである。自然の模倣の美しい姿を「窓」に見た。「客人」は、こうして、「これまで日本で見た中で最も美しいもの」として素直に評価したのである。もちろん視線を重視するコンキスタドールは、二条離宮で、迫力の松と、輝きだけでなく深淵もある金とに衝撃的に出会っていたからこそ、この西本願寺で、草花のやさしさに感動した。さらに言うなら、『黄金の頭』において、垂直性を表す力強い父の大樹と、草花のように動かない大地の母とを表現したコンキスタドールならば、この大樹の迫力と草花の美しさを京都で発見し感動しても不思議ではない。

４　結び　～黄金の頭から、眼差しによる確認者に～

シモン、黄金の頭、国王という若者は、1898年の日本を訪れた。そして自らにとって重要なテーマを日本でも見て取ることが出来た。「大樹」のテーマを東海道の松と京都の金色障壁画の長押の上へ延びる松図に、「黄金」のテーマを多彩な輝きと不在の炎の東照宮と、京都の金碧障壁画の二条離宮と西本願寺に、「征服者」のテーマを死者から神へと変貌する東照宮の秘儀と、眼差しによって神の摂理を助ける山中の確認者に、それぞれ見て取り、その散文詩において新たに展開させ深化させた。

そしてこれらのテーマにすべて関わるのだが、自らの眼差しの力を中禅寺坂で体験したことが、旅の後半や将来にとって最も重要である。

クローデルは見ることが好きで、遠くまでよ

く見るために幼い時からリンゴの木に登ったし、シャンシーの高みからパリに向かって広がる谷を眺めた少年であった。

しかし、万物をつなぐことを初めて体験できたのは日本であったし、一度挫折した黄金の頭は、面積の所有でない万物の調和という世界統合が、眼差しで達成できることに、日本で気づいた。自然の本質を表現した日本の画家の「窓」を「客人」として楽しんだのも、京都であった。西本願寺には「二条と同じ障壁画の効果」をみた。違う「窓」の金碧障壁画の上に描かれた、父なる大樹の松の迫力と、細やかな母なる草花の秋の風情の金色による美しさ。二つの場所のその両方を、万物をつなぐように眼差しでつないだ。すなわちクローデルは、自然界の万物をつなぐだけでなく、複数の窓に描かれる神の創造物の本質同志を、自らの眼差しで補完し合ったのである。新たなコンキスタドールの誕生である。

「わたしは、被創造界の検査官であり、現存する事物の確認者であり」、まことにあらゆるものを確認することが出来る。1898年に実感したこの眼差しでもって、23年後に大使として、再び「東洋という偉大な書物をもう一度読み」ときに来たのである。そしてこの地で、コンキスタドールとして世界制覇と日本の把握をして、『繻子の靴』を執筆し、1924年１月の日記[注61)]にあるように、クローデルは宇宙征服という野望を実現した。『黄金の頭』のシモンから三十数年を経ての実現であった。

注

1）Paul Claudel, *Journal I*（1904-1932), Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1968, p.501.（以下、*Journal I* と略す。）日記、1921年１月10日。

2）井戸桂子「ポール・クローデル　日本の旅人」、『ポール・クローデル　日本への眼差し』（水声社　2021年）、井戸桂子「クローデルと二条城―「松の中の譲位」でのコンキスタドール」、『ポール・クローデル　日本とその時代』（水声社）

3）*Journal I*, p.618. 1924年１月。

4）Paul Claudel, “Mon pays”, *Œuvre en Prose*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1965, p.1126.（以下、*Œuvre en Prose* と略す。）

5）実際の『繻子の靴』脱稿は1924年10月22日。しかし、前年９月の関東大震災時には、すでに四分の三までは成っていたので、1924年１月の日記の時点では、ロドリーグの日本支配のシーンは書き終わっている。

6）渡辺守章「解説」日仏演劇協会編『今日のフランス演劇４』（白水社、1967年）381頁。なお、本稿での『黄金の頭』の引用文は、同書、渡辺守章訳である。

7）Paul Claudel, *Mémoirs impovisés*, recueillis par Jean Amrouche, Gallimard, 2001, p.70.（以下、*Mémoirs* と略す。）

8）Paul Claudel, *Tête d’Or*, *Théâtre I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1967, p.295 .（以下、*Théâtre I* と略す。）翻訳は、渡辺守章訳『黄金の頭』『今日のフランス演劇４』より。

9）*Théâtre I*, p.182.

10）*Ibid.*, p.183.

11）*Ibid.*, p.184.

12）*Ibid.*, p.186.

13）*Ibid.*, p.187.

14）*Ibid.*, p.251.　1886年12月25日、ノートルダム寺院で回心するというクリスマスの衝撃のあと帰宅して読んだ『箴言集　８』に、女性を知性と擬人化する言葉があった。栗村道夫、『ポール・クローデルの作品にお

ける聖徒の交わり』サンパウロ、2000年、58頁。渡辺守章「解説」、前掲『今日のフランス演劇４』385頁。

15）*Ibid.*, p.273.

16）*Ibid.*, p.186.

17）*Ibid.*, p.235.

18）*Ibid.*, p.240.

19）*Ibid.*, p.242.

20）*Ibid.*, p.245.

21）*Ibid.*, p.248.

22）*Ibid.*, p.255.

23）*Ibid.*, p.256.

24）*Ibid.*, p.296.

25）*Ibid.*, p.295.

26）*Mémoirs impovisés,* p.36. クローデルはこの頃、旅行記を読んだと述べる。p.135. 姉の影響で日本に魅かれたという。

27）チェンバレン、メイスン編、『日本旅行案内』, B. Chamberlain and W. Mason, *A Handbook for Travellers in Japan*, Murray, London, 1894. p.264.（以下、*Handbook* と略す。）

28）これらの情報を、クローデルは確かに読んでいる。散文詩「松」に、「東海道という古くて悲劇的な街道にそって、私は松を見た」と書いているからである。

29）Paul Claudel, “Le Pin”, *Connaissance de l’Est, Œuvre Poétique,* Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1967, p.79.（以下、*Poétique* と略す。）散文詩は拙訳。

30）*Poétique,* p.80.

31）*Mémoires,* p.74.「マラルメは私にこう言いました。（…）光景を前にしたとき、それを描写しようとして、この光景はなんであるのか、これはなにか、とは問わず、これは何を意味するのか、と問うことだと。」

32）*Poétique.,* p.81. なお、大使時代も松への言及は続く。大使時代、彼は毎日お堀端一周の散歩で松を愛で、『聖ジュヌヴィエーヴ』の出版に際しても富田渓仙による松の挿し絵を入れた。日光で行った講演でも東海道の松に触れた。東海道の松並木を中風の患者や貧者と同じく、神の特別な特権を得た崇高な姿という。”Un Regard sur l‘âme japonaise”, *Œuvre en prose,* p.1131.

33）*Handbook* , pp.72-73.　ガイドブックには徳川家康と書かれていないので、クローデルはイエヤスあるいは将軍と呼ぶ。

34）*Handbook*, p.164. Paul Claudel, *Les Agendas de Chine*, texte établi, présenté et annoté par Jacques Houriez, Coll. Du Centre Jacques-Petit, L’Age d’Homme, 1991. p. 308.（以下、*Agendas* と略す。）

35）“L’Arche d’or dans la forêt”, *Poétique,* p.81.

36）『朝日の中の黒い鳥』所収の「後の国」など。

37）*Poétique,* p.81.

38）*Poétique,* p.82.

39）*Poétique,* p.83. 筆者が東照宮御文庫で調査したところ、実際、この頃の大例祭では、６月１日と２日が例祭、３日に金幣でお祓いし、鈴と共に舞う巫女たちの「金幣祈禱式」があった。また、側面の垣根は、ハンドブックの初代執筆者アーネスト・サトウも注目しているように、厚みのある彫刻が施され、それが金色に塗られているので、日差しを受けると見事に輝くのである。それをクローデルも実見した。

40）このように、森と建物を海にたとえる例はクローデルの他にもあり、例えばエミール・ギメは、「屋根が金色の大海で、その大海に樹木が緑の小島を作る。」とみる。青木啓輔訳『東京日光散策』雄松堂出版、昭和58年、153頁。

41）クローデルは「イエヤスの遺骨は青銅の筒

に収められて」（*Poétique,* p.83）と述べているので、実際に東照宮の造営の中でも最も奥にある宝輪塔まで足を運び、l'archeに契約の聖櫃という意味も重ねた。

42）*Poétique,* p.83.

43）*Poétique,* p.84.

44）*Handbook,* p.174.

45）手嶋潤一、『日光の風景地計画』随想舎、2006年、p.46.　例えば1893年、日本人はほぼ同じ84,598人であるに対し外国人は2,050人だけであり、４年後の1898年はおよそ倍増したと言える。

46）*Agendas,* p.185.

47）“Le Promeneur”, *Poétique,* p.84.

48）*Poétique,* p.85.

49）“Art poétique”, *Poétique,* p.143.

50）*Poétique,* p.85.

51）*Agendas,* p.308.

52）*Agendas,* pp.307―313.

53）“Ça et là”, *Poétique,* p.86.

54）*Poétique,* p.88.

55）*Handbook,* p.305.

56）*Agendas,* p,311,

57）*Poétique,* p.88.

58）大使時代の日記には大覚寺の山楽による大きな古木の「紅梅図」についての考察がある。*Journal I,* p.583.『百扇帖』にも、短詩がある。*Poétique,* p.738.

59）岡村喜史『西本願寺への誘い』、本願寺出版社、2016年、p.69.

60）*Agendas*, p.312.

61）*Journal I*, p.618. 1924年１月